

「びくびくする左目」

まいちゃんは小鳥の様にかわいくて人形みたいで、いつもきらきらしている。そして私とても仲良くしてくれる。

まいちゃんは、時々左目の下がびくびく痙攣する。本人はそれに気づいているのか、それを隠す様にまゆげをいじったり目の下をマッサージするフリをしている。恐らくその痙攣は止めようと思って止められる現象ではないと思う。そしてびくびくしているのを人に見られるのが嫌だから隠そうとするのだと思う。まいちゃんは良い子で明るくてうらやましい女の子だけれど、びくびくがあるから台無しだと思う。私はうらやましいけど、やっぱりうらやましくないから、プラスマイナスゼロだと思う。

まいちゃんと一緒に写真を撮るのはうれしい。よく誘ってくれる。でも撮った写真にはかわいい彼女とは対照的に、醜い私がいる。それを見るのはいやだから、私の部屋にある一緒に撮った写真の私自身は、マジックで黒く塗りつぶしてしまった。かわいいまいちゃん。

まいちゃんは写真の中で笑顔を見せている。写真だから目の痙攣も無い。その彼女の左目を赤ペンで丸く囲ってみたら胸がすっとした。しばらくして自分の醜さに泣いてしまった。まいちゃんごめんね、私はあなたが大好きなのに大嫌い、とつぶやく自分に失望して泣いてしまった。

まいちゃんの左目を、男の子達とおしゃべりしている時に私は頻繁に見てしま
う。もっと痙攣すればいいのに、と思っている。男の子達にそれを見られてしま
えばいい。「おい、こいつの左目、びくびくしてるぞ」って笑われてしまえばいい。
そう思えば思うほど私はぬめぬめした沼の上に立っている気分になる。そうして
彼女と手を繋いで帰る。私は彼女にクッキーを焼く。彼女は私に紅茶を入れてく
れる。同じ様な服を着て、同じ様な口癖をしてみても、彼女はお姫様で私は醜い
下女に思えた。彼女が輝いて見えれば見える程、私は卑屈になった。そしてその
卑屈になる事自体が嫌でたまらなかった。

まいちゃん以外の友達と一緒にいると、あまりかわいさに差が無いから気楽で
いられる。でもまいちゃんに比べるとみんなはいじわるで利己的だから、私はど
こかさびしい気持ちになる。私の居場所はどこにも無い気分になる。

まいちゃんと私は、周囲から親友だと思われる。みんながそう思っている。
私もそう思っているし、彼女もそうだと思う。私達はおそろいのクマの携帯スト
ラップをつけている。でも私はまいちゃんの左目がびくびくしていなかったらた
ぶん友人関係を続けられないと思う。びくびくする左目は、いびつな私の心の一
部の様な気がする。

まいちゃんに以前「どうして私と友達なの」と聞いた事がある。普通はかわいい子ばかりで仲良くする事が多いと思うし、男の子たちからも私とまいちゃんが友達なのは変だ、ぶすはぶす同士で群れてればいいと言われたからだ。まいちゃんは私の事を引き立てるために仲良くしているのじゃないかと邪推した。

まいちゃんは、だってかわいくてやさしいから、だから友達でいてほしいと思うんだよ、とにこやかに言った。嘘はついていない感じで、だからこそ邪推した自分が恥ずかしくなったけれど、私は皮肉を言われた気分は無理やりなってしまった。だから「うそつき」と言ってしまった。彼女は左目をびくびくさせながら、どうして、と言ったけれど、別に理由もないから「だってうそじゃ」と強がるしかなかった。

まいちゃんの事を家に帰って考えた。本当は私はまいちゃんがうそつきであつて欲しかったのかもしれない。私を引き立てる役にして欲しかった。それで私は納得できるのだと思う。かわいいまいちゃん、そうじゃない私。一般的にはそう見られているんだから。グループが違うんだから。でも彼女は私と同じグループに見立ててくれていた。本当は彼女はかわいくて優しくして非の打ち所がなくて、私はそれに嫉妬しているだけなんだ。世界の中心は彼女なんだと思っていた。彼女の痙攣する部分だけが私が繋がりあえる部分で、それ以外は相容れないものなん

だと信じ込んでいた。「謝ったら」という私と、「そんな事なくていい、余計な
じめになる」という私が心に居た。

*

まいちゃんとの関係を修復できないまま、彼女は転校してしまった。別れの挨拶もきちんとできなかった。本当は事前にメールで教えてくれたのに、無視してしまった。最後の登校日、周りの友達が教室でお別れ会を開いた。みんなはわんわん泣いて別れを惜しんでいた。私はたまらず図書館へ逃げ込んで、適当に本を選んで眺めてみた。内容がまったく入ってこない。代わりに彼女との色んな思い出が次から次へと浮かんできてしょうがなかった。そうして、書棚の奥の奥でしゃがみこんで声を殺して泣いた。その後、彼女からの連絡は一切無かった。彼女のいない生活に私は紛れていった。

*

そうして一年半後、友達と街で買い物をする約束をして、待ち合わせ場所について友達と友達、ねえびっくりりする人がくるよ、ちょっとだけ待ってて、と言うので訳も分からず待っていると、友達が「実はね、富田まいちゃんが来るんだよ」と

言った。動転した私が、どうしよう逃げたい、とまごまごしている内にまいちゃん
んが来た。たまたまこちらに戻ってきていたらしく、またその友達は転校後もま
いちゃんと連絡を取っていたらしかった。綺麗に成長した彼女は以前と同じ柔ら
かい笑顔で久しぶりだね、と言った。もう左目はびくびくしていなかった。可愛
らしい着信音が鳴り、あ、ちょっと待ってと彼女は電話に出た。あのストラップ
はもうついていない。彼女が電話をしている間、私は何とも居心地悪そうに、ポ
ケットの中でクマの携帯ストラップをぎゅるぎゅると爪で押しているしか出来な
かった。